

4館共通演目

新作狂言

「安土城ひみつ会議」

脚本／三千院 高穂

あの「本能寺の変」が起きる六ヶ月前、安土城では新年会に参加する織田家家臣が集まっていた。そんな中、最近お屋形様に嫌われているのではないかと心穏やかでない明智ひでみつは、羽柴ひできちに相談を持ちかける。そこに陽気な宣教師オルガンヒキーノや若きキャリア組の蒲生さとうじが加わり、話が思わぬ方向へ…。やがては、お屋形様のあらぬ秘密が暴露され…。近江を題材としたパラレル大河狂言。今、歴史の謎が明かされる!

2011年から、茂山千五郎家の協力を得て、滋賀県を題材にした新作狂言を制作し今年で4作目となります。
今後、これらの作品を「おうみ狂言図鑑」としてコレクションしていく、滋賀県だけでなく、全国でも広く上演され、狂言の「笑いと近江」の魅力を発信し、みなさんに親しまれていくことを目指します。

おうみ 狂言図鑑って?

茂山家は江戸時代以来京都で狂言師として活動してきた狂言大藏流の名門です。9代目の茂山千五正席が彦根城主であった井伊直弼に見出され彦根藩に抱えられており、滋賀県にもゆかりがあります。茂山家の狂言は、豆腐のように誰からでもどこでも愛される、飽きのこない、そして深い味わいを目指した「お豆腐狂言」で知られ、現在も400年にわたり京都に息づいてきた狂言の普及・継承につとめられています。

茂山千五郎家の お豆腐狂言

2/23(日) 14:00～ 日野町町民会館わたむきホール虹 ☎ 0748-53-3233

※駐車場は、わたむきホール虹および日野町役場をご利用ください。

二人大名(ふたりだいみょう)

二人連れで都へ上ることになった大名が、供を連れていなかったで、ふと通りがかった男を供に仕立てて太刀を持たせます。大名たちが満足しながら歩いていると、男は次第に腹が立ち、渡された太刀で大名を脅します。大名は脇差や素襖を取り上げられてしまいます。次第に男の要求は増していき…。



柿山伏(かきやまぶし)

修行帰りの山伏が空腹のため道端の柿の木に登り勝手に柿を食べていると畑主がやってきます。畑主は木の陰に隠れた山伏を見つけるとからかってやろうと鳥や猿だと言って鳴きまねをさせます。しまいには鳶のようだから空を飛ぶだろうと困らせます。離され、のせられた山伏は鳶の鳴き真似をしながら木から飛びおりたものの…。



3/2(日) 14:00～ 愛荘町立ハーティーセンター秦荘 ☎ 0749-37-4110

萩大名(はぎだいみょう)

長らく在京している田舎大名が太郎冠者と共に、ある庭の萩を見物に行きます。ところが庭の持ち主は大の風流者で歌を詠むことを所望します。歌を詠むという嗜みのない大名はいやがりです。そこで冠者は「七重八重九重とこそ思ひしに十重咲きいづる萩の花かな」という歌を大名に教え、7、8、9などの数字を扇の骨で示し、「萩の花」では自分のすねはき[足のすね]を見せるなど、歌を思い出させるヒントを出すことにしますが…。



棒縛り(ぼうしばり)

留守になると家来たちが酒を盗み飲みするので困っていた主人。そこで次郎冠者を棒に、太郎冠者を後ろ手に縛って出かけてしまいます。不自由な格好で留守番するはめになった二人は、ならばいよいよ飲んでやろうと工夫を重ね、ついに酒にありつきます。二人が酒宴を繰り広げているところに用事を終えた主人が戻ってきて…。



3/9(日) 14:00～ 彦根市みずほ文化センター ☎ 0749-43-8111

蚊相撲(かずもう)

相撲が流行していたので大名が相撲取りを抱えようと、太郎冠者に適当な者を探さう命じます。しかし太郎冠者が連れてきたのは都で相撲取りになり思いのままに人の血を吸おうと考えている江州守山の蚊の精でした。大名は自ら相手をして相撲を取りますが…。



附子(ぶす)

太郎冠者・次郎冠者に留守番を言いつけた主人。桶の中身は附子という猛毒なので絶対に近づかないように、と言って出かれます。二人がこわごわ桶の中を覗き込むと、中身はおいしいそうなお砂糖。結局すべて平らげてしまい、言い訳のために主人秘蔵の掛け軸や天目茶碗を壊して大声で泣きながら主人を待ちます。帰宅後、激怒する主人に二人は…。



3/23(日) 14:00～ 東近江市てんびんの里文化学習センター ☎ 0748-48-7100

末広がり(すえひろがり)

ある果報者が、家来の太郎冠者に都へ「末広がり」を買いに行くよう命じます。しかし太郎冠者は、末広がりを何であるか知らず、困った挙げ句、物売りを真似て「末広がりを買おう」と呼び歩きます。そこにすっぱ(詐欺師)が現れ、言葉巧みに古傘を売りつけます。主人の注文どおりの品が手に入ったと思いきや、主人の注文とすっぱは、主人の機嫌を直す囃し物まで教えます。帰宅した太郎冠者が得意げに報告すると…。



仏師(ぶっし)

自宅に御堂を建てた田舎者がそこに収める仏像を買い求め都へと出かれます。しかしなかなか仏師を探し当てられずいました。そこに現れたすっぱ(詐欺師)は自分は仏師であると申し出ると、田舎者は喜び、仏像を早速注文します。翌日受け取りに行くとき確かに仏像はあるが印相(仏像の手の形)がおかしい。手直ししようと仏師を呼ぶと…。

